随想

一七一九年（享保四年）毛利家で起こった事

―諏訪神社建立の本当の事情は？―

戸山恵子
（会員　佐伯市匠南区）

二基の五輪の塔

実家の菩提寺である城下西町の久成寺。お盆や年末、お彼岸の頃に、体の弱くなった両親のかわりに訪れるお寺です。幼い頃は「亀さんのいる寺」としてよく遊んだものですが、最近は、当時は気づきはしなかった事に興味を持ちだしました。

正門を入ってすぐ左手、鐘つき堂の横には巨大な「法如院（俗におませ様と呼ばれる六代高政の側室・山下満勢子）」の一石一字の供養塔があります。その奥まった先には中島子玉の墓があり、そのまた奥へ進むと二基の立派な五輪の塔が出現します。二基とも小さいけれど周りの墓とは明らかに異なる方のものだとわかります。

二基とも同じ大きさで、右が放光院、左が慈眼院と読み取る事が出来ます。このお二人が六代藩主高慶の三男千代熊（法光院）と五男成五郎（慈眼院）だとわかったのは、つい最近の事でした。

温故知新録を読んでいくと二人は、四歳と五歳で夭折。久成寺に埋葬された事がわかります。成五郎の生母は成五郎宅（彼は守役の谷川覚兵衛宅で養育されていた。）から城中への帰り、千代熊の墓に詣でたという記事があるので断定は出来ませんが、生母は同じ方だった可能性があります。

高慶の妻たち

幼い二人の母親は「奥井志幾子」という女性です（あくまで仮定です）。彼女自身の墓は奥井家の菩提寺である潮谷寺にあります。

五、六人は認められる高慶の側室の中で千代熊、成五郎、吉子、娶（かさぬ）と、記録に残っているだけで四人の子どもを生んでいます。高慶の正室は対馬の名門、宗義真の娘で琨（こん）子。江戸在中で長男高通を生んでいます。

国元の佐伯には側室第一号の大田加久子が、津礼子、亀三郎を生み、南部家へ養子に行くことになる信之の生母篠原津与子もいました。その他、生母の名前が確定しない（温故知新録・鶴藩略史では判明しない）こどもたち、千吉、吟子、弁子、皆子の母親たちがいます。

ほとんどの子どもたちが佐伯で生まれ、成人してから嫁入りまでは江戸で生活していますが、江戸で生まれ江戸で亡くなったのは、満勢子を母とする高能だけです。江戸の下町の舞子だったと言われています。弁子以下は一七二九年（享保十四年）以降の生まれですから、その前年には亡くなっている満勢子が生母ではないことがわかります。高慶晩年に「常（つね）」という女性を側室にしていますから、あるいは彼女かもしれません。「いつ」という側室もいました。

温故知新録や鶴藩略史を読んでいくと、高慶の子どもたちが、生母は異なるにしろ実に順序正しく、間隔をおいて生まれていることがわかります。

逆に言えば、彼は決して好色などではなく血脈を保つため、又、妻の役割をはたしてくれた妻たちがいたことになります。……だから、彼の私生活は平和だったはず……ですが……。（表A参照）

高慶の妻と子どもたち（表A）

名前	生　年	没年齢	生　母	備　考
高　通	1703	31歳	正室　宗琨子（源智院）	
津礼子	1706	1歳	大田加久子	
亀三郎	1708	5ケ月	大田加久子	
千代熊	1711	4歳	奥井志幾子？	
千　吉	1712	3歳	奥井志幾子？	
成五郎	1714	5歳	奥井志幾子（智覚院）	
吉　子	1715	4歳	奥井志幾子（智覚院）	
高　能	1717	24歳	山下満勢子（法如院）	
信　之	1720		篠原津与子	南部家へ
富　子	1727		？	竹中家へ
弁　子	1729		？	戸田家へ
裟	1730		奥井志幾子（智覚院）	山野辺家へ
皆　子	1731		？	巨勢家へ

※温故知新録（九）によれば、高慶没後に江戸で出家した法寿院（1772年没）や寿徳院（1756年没）の法名が確認されますが彼女らの名前は確定できませんでした。

一七一九年（享保四年）のでき事

俗にいう「おませ様事件」が起こります。事件の真偽は不明ですが、主人公の山下満勢子は江戸にいましたから、佐伯の人たちに噂話として面白おかしく伝わった可能性があります。

事件の内容はこうです。

享保二年（一七一七年）、十五歳になった長男助十郎を伴い将軍吉宗にお目見え、摂津守を叙官、名前を高通と改めます。翌年、仕官の御礼言上のため再び江戸城に上ります。その控の間で激しい下痢に襲われ、便を漏らすという失態をしてしまいます。その為拝謁をしないまま退出。このことで高慶は高通を病気と発表し、江戸藩邸に押し込め外出を禁止します。

翌年には、まだ二歳の大八郎を四歳と偽り、嫡子交代の届けを出します。

大八郎の生母が「おませ様」こと山下満勢子なのです。

この一連の事件が、誰かが高通に下剤を盛ったのではないか、その犯人が満勢子と家老の岩本平左衛門ではないかという噂が広まり、数年後の一七二八年（享保十三年）ついに彼女を下屋敷に監禁、翌年に亡くなります。自殺とも狂死ともいわれ、同時に岩本平左衛門も免職。有名な「蛇責め伝説」が生まれます。屋敷牢の中で蛇責めにあって亡くなり、その蛇を献上？した村は、代々蛇肌の子が生まれたという怖いお話です。

テレビのワイドショーもどきの顛末に、佐伯の人たちの格好の話題になったことでしょう。

この事件は実は不思議な事がたくさんあります。

第一に、仮に事件が事実だとしても高慶は藩主の座を（実際には嗣がなかったのだが……）高能（大八郎）から替えることはなかったことです。事件後には弟たちも存在しているのにもかかわらずです。

第二に、長男でしかも正室が生んだ高通を、なぜ早々に廃嫡してしまったのかです。病弱という理由ですが彼は結婚もし、二人の子どもまで生まれています。

高通が拝謁した将軍吉宗も、障害を持ち病弱な長男家重へ家督を譲っています。優秀な次男、三男がいたのにで

す。ただ単に高慶がお満勢を寵愛したとか、将軍家に対する不敬を怖れたとかいうこととは別に、高慶側に無理をした別の理由があったのではないかと考えてしまうのです。

避けたかった妻の実家の影響力

彼は、「妻の実家の影響力を極力避けたかったのではないか？」そう推察します。五代、六代共に久留島家からの養子だった毛利家は、二代高成の正室が久留島家と姉妹という関係だけで、二代から六代まで（正確にはそれ以後も）最も近い親戚として実権を握り、ついに乗っ取り？に近い形で二代続けて藩主を送り込んで来たことは、彼自身が一番良く知っています。乗っ取りとは言葉は悪いけれど、初代高政とは何の血縁のない久留島家の血が毛利家に流れることになったのは事実です。

【閑話休題】

昨年十月十六日の歴史講座では、四代高重が二十一歳で急死した後、手際よく久留島家との養子縁組が整った理由をいくつか紹介して戴きましたが、私は、元々両家は二代高成の頃からの親戚づきあいがあり、お互いの家庭事情を熟知していたこと。それに江戸屋敷が近かったこともあると思いました。講師の先生は、藩主の参勤交代は毛利家と久留島家とは異なる年だから、江戸城「柳の間」の控え室で逢うことはなかった。従って、藩主同士が顔を合わせて話すチャンスはないから、それは違う旨の事とおっしゃっていましたが、それは男性の考えそうな事、藩主同士は江戸でも地元でも会うことはなかったでしょうが、江戸藩邸に住んでいた主婦（女性たちと、それに仕える武士たち）は、常時交際していたわけです。三代高尚、四代高重は共に正室不在でしたから、二代高成の正室と久留島家二代通春の正室同士が姉妹だった関係以来、最も近い親戚として地元から選別された賢い女性たちが情報交換をしあっていたのです。現代でもそうですが、具体的なつきあいをするのは主婦の方ですからね。

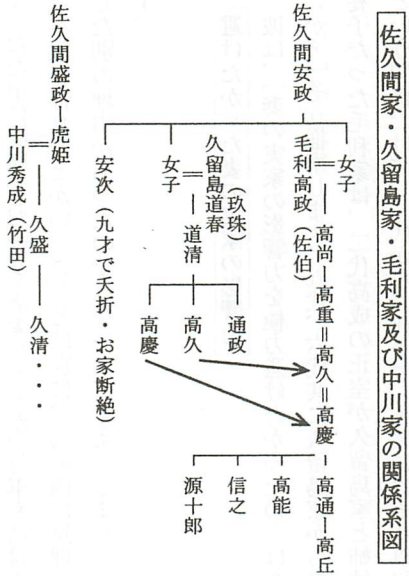
妻の実家の影響力の大きさを身をもって知っていた彼は、やがて毛利家の内政、ついには後継者問題にまで干渉するかもしれない宗家出身の正室が生んだ長男の廃嫡にためらうことはなかったのではないか？

十万石の大名から押しつけられた（鶴藩略史には藩主自ら頼まれて琨子姫と結婚したと記されているが、おか

しな話だ）正室、ひいては宗家そのものを高慶が嫌っていたのではないか。大名としては一番石高の低い一万余石の久留島家出身、しかも養子の彼からしてみれば、十万石出身の正室は煙たい存在だったかもしれません。彼が若く壮健聡明なだけに……です。

側室との子どもなら表向きは正室の子として届けは出すにしろ、満勢子のような下町の舞子出身だったり、当時としては、身分が武士より低かった医者の娘の志幾子を生母とする方が、実家の口出しはもちろん、莫大な交際費もかからずにすむからである。

佐久間家・久留島家・毛利家及び中川家の関係系図



次々に建立した寺社、その理由は？

しかし、高慶の強引ともいえるやり方は、彼自身もわかっていたし、特に国元では藩主の決断に困惑し、お家騒動めいた「おませ様事件」というストーリーが生まれたのではないかと思う。

二歳の大八郎が後継者に決まった時、男の子は彼しかいませんでした。千代熊、成五郎が無事に成長していれば、大八郎に家督が廻ってはこなかったでしょうし、それは亀三郎、千吉も同じです。それぞれの母親は複雑な思いで成り行きで見ていたことでしょう。その母親たちに仕える家臣たちも同じだったと思います。

この国元の微妙な空気を察知した高慶は、対策の一つとして、佐伯に次々と寺社を建立、又は修理工事を行ったのではないか？

公共事業が増えることは領民にとって大歓迎で、それで政治不信も緩和できる効果もあるわけです。

特に一七一九年（享保四年）、木立の諏訪神社建立に着目します。この年こそ、十七歳の高通を廃嫡し、二歳の大八郎が世継ぎと決まった年なのです。志幾子の要請によるとありますが、それだけではないと思います。

この年に吉子、前年には成五郎、さらに六年前には千代熊を亡くした彼女の心安かれとの気持ち、夭折した子どもたちの鎮魂、ひいてはそれが大八郎の無事な成長につながるはずと高慶は考えたのではないでしょうか？

志幾子にすれば我が子が生きていてくれればとの無念さもあったでしょう。特に三男千代熊という名前は、高慶の幼名を与えていたわけですから期待されていたはずです。吉子の死から十数年後、今でいう高齢出産のため、源十郎（娶）を出産後、産後の日だちが悪くて亡くなってしまうのも、何か彼女の執念めいたものを感じます。

尚、俗書には志幾子が高慶の側室の中でも最も多くの子どもを生んでいることから、佐伯の「お国御前」（地元での正室同様の立場）で、大八郎を生んだ満勢子と対立していたかのように言われていますが、それは事実ではないと思います。

彼女は当時としては武士より身分が低い医者の娘であったこと、側室になったのが佐伯では二番目であったこと、彼女の生んだ男の子たちが養賢寺ではなく、久成寺に葬られたこと等から推察されます。お国御前として佐伯での妻の役割をはたしたのは、大田加久子（だと思う）。高慶亡き後も「佐伯側室」という名で、後々まで温故知新録に登場しています。武士の娘であるということ、最初の側室でもあったこと、亀三郎を生んだ時は「お袋様」という呼び名を許され、母子共に家臣たちにお披露目が行われ、子どもたちは養賢寺に葬られた事等が理由です。

他には、後世からみると不思議な感じの「篠原津与子」という側室もいました。彼女は信之を生みますが、彼が南部家へ養子に行くことが決まると、家臣の中根曾右衛門へ持参金付きで再嫁させています。温故知新録（四）での言葉をそのまま借りれば「若いので可哀想だから」との高慶の計らいです。自分が生きている間に、若い妻の将来を心配してからのことなのでしょう。当時は「拝領妻」は名誉なことで、藩主もお気に入りの家臣にのみ与えていたそうです。ちなみに持参金は三十両。老後の心配のない金額です。

家督は孫の寅太郎に

大八郎の長寿とお家安泰を願って領内に数々の神社、仏閣を建立・修復。元服後は高能と名乗った息子には、名門松平家から総子姫を正室に迎え、盛大な結婚式をあげたのもつかの間、二十四歳の一月天然痘であっけなくなくなってしまうという高慶最大の痛手を負うことになります。

六十六歳の高慶は、親戚筋にあたる久留島家、松平家と相談の上、廃嫡した長男高通の長子、寅太郎を江戸に呼び寄せ、嫡孫承祖願いを幕府に届け、受理。二年後七代藩主毛利高丘が誕生。幕末まで血脈は保たれることになります。

正室の実家であり、高丘の外戚でもある宗家とも益々親密になることになります。こんなことなら、最初から長男に譲っておけば良かったのに……とは、後世の私たちの感想です。高能が亡くなった時、末弟の源十郎がいたにもかかわらず、孫の寅太郎に家督が廻ったのは、やはり高通廃嫡に無理があったことが伺えます。

江戸時代は、愛情の深さや生んだ子どもの数より、母親の身分が最優先になることが改めてわかった気がします。

おわりに

櫻が満開の四月七日、鶴城高校前から養賢寺へと山際どおりを歩き、真っ赤なポストから久成寺まで歩いてみました。キリスト教ではイースターにあたるこの日、教会から頂いた百合の花とかわいいイースターエッグを幼くして亡くなったお二人に持って行きました。

藩主にならなくても、せめてもう少し長生きして、明君と言われた父君を助けてほしかった。あの宝永四年の津波対策として作った馬場の土手を母親と共に誇らしく歩いてほしかったと思いました。